Essay エッセイ

人生の転換点を支える仕事

国際教養大学（AIU）教員
堀井 里子（平成11卒）

ほりい・さとこ／東北大学文学部社会学専攻卒業。在メキシコ日本大使館にて勤務（派遣員制度）後、一橋大学国際・公共政策大学院（国際公共政策学修士）、イギリス・オックスフォード大学（強制移住学修士）、同・サセックス大学（政治学博士）修了。2013年より国際教養大学に勤務。現在、同大国際教養学部グローバル・スタディズ課程助教。

「進路についてアドバイスをほしいんですけど……」。国際教養大学のキャンパスが紅葉で美しく彩られるこの季節は、卒業を来春に控えた学生の多くが就職先から内定をもらい一息つく頃である。だが、中には大学院進学希望者など正念場はこれからという学生もいる。こうした学生は取り残されたような不安な気持ちを抱えている。人生最大の危機という面持ちで相談にくる学生もいる。講義や研究だけでなく、学生の自己実現のためサポートすることも、大学教員の大事な仕事だ。

高校時代は、秋田に戻ることはもちろん、大学教員になるとは思ってもいなかった。当時は、さまざまな国の人々を同僚にもてるようなところで働きたい、そのためには海外かな、と漠然と思う程度だった。実際、大学進学後に留学したメキシコで働いたのだが、その過程で移民の存在や、人の境遇を分け隔てる象徴としての国境というものに関心を持つようになり、大学院に進学し専門的に研究することにした。

大学院では、欧州連合（EU）を研究対象にした。その理由は、国境の壁を取り払い人の移動を自由にするという面白い試みをしているからだ。そしてEUは、人の移動の自由だけでなく、単一市場や地域通貨ユーロに代表されるようにいろいろな分野で統合を進めている。他方で、経済危機に難民危機、英国離脱問題、ポピュリスト政権の台頭などさまざまな試練に直面しているのも事実である。地域統合の試みは、失敗とみなすべきなのだろうか？この秋学期、AIUの学生と討論しているところである。

今、学生と毎日接する中で役立っているのは、研究を通して得た知識だけでなく、これまで得られた経験である。たとえば、修士課程で学んだオックスフォード大学では、国籍、人種、宗教、文化背景やいわゆる社会階層など何につけても多様性に富んだ環境に恵まれ、刺激を受けた。難民キャンプで生まれたという学生や、母国では医学生なのに「面白そうだから」と私のいた文系の修士課程に留学してきた学生もいた。考え方の違いから激しい議論もあったが、パブで飲み語らう時は和気あいあい、そういう気持ちよさが新鮮だった。リサーチ・インターンとして働いたEUの沿岸警備・国境管理組織では、その性質上非EU市民には門戸が開かれていないのだが、私の上司となったスペイン人スタッフが「自分たちの活動はむしろオープンであるべきだ」と主張し特別に採用してくれた（らしい）。多言語が飛び交う職場は想像以上にオープンで、何の後ろ盾もない日本人学生の博士論文のためのインタビューにもみな気さくに対応してくれた。文化や考え方の違いを尊重しつつ、ともに働く仕組みに関しては、危機を抱えてはいても欧州は一歩も二歩も進んでいる。

危機は、問題の所在を捉え、歩むべき道を見つめる契機である。危機的状況にあると信じる学生にも、そんな観点から自分の進路を考えたらと促している。私自身、幼子二人を抱え自転車操業の毎日。「ストレス発散」を理由に甘味をほおばるせいか健康診断ではひっかかり、仕事・育児・健康の複合危機に陥ってしまっている。結果オーライを目指し、まずは昼休みの散歩から始めたい。

EUによるギリシャ領海のナイトパトロール船に乗せてもらった時の写真（2016年）

AIU大学祭での竿燈実演を子どもと見る筆者